

白鳩学園物語

えんぞ

第一章

「明日からの研修は宇崎さんに決まった、それから研修の模様はビデオ撮影します。そのビデオを見て残りのみなさんは、レポートを提出してください。詳しくは来週のホームページの時間に説明します。あとで、宇崎さんは研修の説明をしますので職員室まで来てください。」

白鳩学園は、幼稚園から大学院まである有名な共学の私立学園である。

そして、放課後。

「それじゃ、私は職員室に行くから、宇崎りりか、友達のおすさに言

って教室を出ていった。

明日からの研修には選ばれて、りりかは嬉しかった。噂ではこの研修レポートは非常に難しく、全体の二分

の一くらいしか合格できないと言われていた。但し、研修に参加した者は無条件で合格になることになっていた。

「失礼します。」

りりかは職員室に入り担任の先生を捜した。

「あの、すみません、南先生はどこらに。」

「あ、南先生なら視聴覚室に行つたけど、もしかして明日からの研修の生徒さん?」

「はい。」

「それじゃ、視聴覚室に行つて南先生からの伝言だから。」

「はい、わかりました。」

りりかは職員室を出て視聴覚室に向かった。

視聴覚室は、カーテンが閉められ真っ暗だった。りりかはドアから頭だけ教室に入れて

「南先生いますか?」

「宇崎か、ちょうどよかった、いま呼びに行こうと思つていたところだ

これから去年の研修のビデオを見てもらつたから参考にするように。それから、ここに研修用のマニュアルを置いておくから、ちゃんと読んでお

けよ。」

南は、視聴覚室を出ていこうとした。

「宇崎、ここに鍵を置くからビデオを見終わったら、後片づけをして職員室に持つてこい。」

「わかりました。」

りりかは、100インチの大画面の前に座り、リモコンでビデオをスタートした。

それから約三時間、りりかはビデオを観た。それから静かに立ち上がりマニュアルを右手に持つて職員室に向かった。なぜか顔が真っ赤になり手が震えていた。

「先生、見終わりました。」

りりかは、小さな声で言った。

「明日から、三日間大変だけどがんばれよ。」

先生は、事務的にそれだけ言うつて、りりかから視聴覚室の鍵を受け取り、席を立った。

りりかは、職員室を出て鞆を取り

に教室に戻った。

教室には、りりかの知らない生徒がりりかの机に座つていた。

「宇崎りりかさん?」

「はい。」

りりかは、彼女のスカーフを見て二年生と知ると、急いで彼女の前に

向かった。

「はじめまして、じゃないんだけど。」

りりかは上級生に友人はいなかつた。

「ごめんなさい、忘れてしまつて。」

「そう言いながら、さっき見た去年の研修ビデオに出演していた研修生の顔と目の前にいる二年生の顔が一致した。」

「あつ。」

「わかつたみたいね、さっきビデオ観てきたでしょ。」

「はい。」

りりか、ビデオを思い出し顔を真っ赤にした。

「研修のマニュアル読んだ?」

「いえ、まだです。」

「急いで、『前日の準備の』とだけ読んで。」

「はい。」

りりかは、急いで椅子に座りマニュアルを読んだ。

みるみるうちに、りりかの顔が更に真っ赤になつていった。

「読み終わった?」

「はい。」

「そういうことだから。」

「そう言つて二年生は、りりかの座

っている横に来て、りりかの頭を軽く撫でた。

「りりかちゃん、それじゃ保健室いこうか。」

「えっ。」

りりかは、一瞬戸惑ったが黙って立ち上がった。

「自己紹介するね、私の名前は白雪優子。優子って読んでね。」

りりかは、上級生をそのまま呼ぶことができずに困っていた。

「優子さん、って読んでいいですか。」

「いいわよ、りりかちゃん。」

「はい。」

「優子さん、聞きたいことがあるんですけど。」

「研修のことですよ。」

「はい。」

「優子さんの場合は、研修の内容は知らされていたんですか。」

「ぜんぜん。今のりりかちゃんと同じように去年の研修のビデオを見せられて初めて知ったわ。」

「それで断らなかつたんですか。」

「ちよっとだけ迷ったけど、勉強ができるほつじじゃないし、単位も欲しかったからね。まあ、勢いって感じかな。」

りりかは、自分も成績が良い方じゃないのはわかってた。

「わかりました、私もやってみます。」

りりかは、明るく答えた。

「もっつだけ聞いていいですか。」

「いいわよ。」

「優子さんはどうして研修の生徒に選ばれたんですか。」

「優子は、しばらく考えたら、多分なんだけけど、中学二年の時に教室でおもしろしをしたからかな。」

優子は答えた。

「りりかちゃんも、学校でおもしろしたことあるでしょっ。」

「えっ、はい。私も中学一年の体育の授業中に、それから小学生の時にまっ回はだ。」

「じゃ、一緒だね。」

そう言つと、優子はりりかの手を握つた。りりかは一瞬びっくりしたがそのまま手を繋いで歩き始めた。

「さあ、着いたよ。」

優子は、保健室のドアを開けた。

「みどり先生、優子です。」

「優子ちゃん、また……。」

優子は、先生の言葉を遮つて、

「今日は、今年の研修のりりかちゃんを連れてきたの。」

先生は、軽くうなずいて、すべて了解済みのようだった。

「じゃあ、りりかちゃんはそのベツトに座つて。」

先生は、白衣の襟を正して準備をした。

「ビデオカメラは、優子ちゃんね。」

「はい。」

「去年に負けないような、すばらしい映像をお願いね。」

「まかしてください、みどり先生。」

そう言つと、カメラをりりかに向けて調整を始めた。

先生は、準備をしてベツトの横に座つた。

「それじゃ、りりかちゃん、はじめるからね。」

「はい。」

りりかは、顔を真っ赤にして落ち着きが無くなつてた。

「りりかちゃんは、そのままじつとしていればいいからね。」

「優子ちゃん、ビデオの準備できました。」

「はい。」

優子は、りりかの足元からカメラを構えて片方の手でOマシンを出した。

先生は、ビデオカメラに向かって

しゃべり始めた。

「幼児心理学の研修の模様を、これからみなさんに観ていただきます。」

まず、研修に先だって、被験者の紹介をします。」

先生は、りりかの横に座つた。

「名前は、宇崎りりか。高校一年生です。まず、研修の準備として、幼児になりきるために、お化粧やアクセサリーなどを外します。」

先生は、りりかを洗面所に連れていき、顔を洗させた。それから、マニキュアをきれいに落とした。

「それから、ちよつと恥ずかしいけど、陰毛をすべて剃ります。」

そういつと、先生はりりかをベツトに横にさせた。

それから、りりかのスカートを脱がし始めた。りりかは、びっくりして手でスカートを押さえた。

「ダメでしょ。もっつ、りりかちゃん、幼稚園の年長さんなんだから。」

先生は、強引にスカートを脱がした。

「靴下も脱ぎましようね。」

さらに靴下も脱がした。

「かわいいパンちゅですね、これも脱ぎ脱ぎましようね。」

先生は、りりかのパンティを一气

に膝まで下ろした。

「きゃっ。」

りりかには、両手で股間を隠した。その模様はビデオカメラに収められた。

「りりかちゃん、ちよつとをお手てをどけてね。」

先生は、りりかの両手を体の両側にどかし、制服の上着をたくし上げて、おへそから下が何も隠すものがないようにした。

「ちよつと、恥すかしいけど我慢してね。」

先生は、両方の足をお腹の方に持ち上げて、左右の足を外側に広げ、股間を丸出しにした。肛門までしっかりとビデオカメラは、記録していた。

りりかには、両手で顔を覆って、羞恥に耐えていた。まだ、誰にも見せたことがない下半身を授業の一環とはいえ、ビデオカメラで撮影され、さらに、クラスメイトのみんなにみられることを考えると、涙が溢れてきた。

先生は、股間を触りながら、

「りりかちゃん、幼稚園の年長さんはね、ここに毛が無いのよ。お友達に笑われちゃうから、ないないしよ

うね。」

と、言いながらハサミで大雑把にりりかの陰毛を切りはじめた。

それから、シェービングクリームを塗って剃刀を使い、股間を綺麗にしていった。タオルで一度股間を綺麗にして、さらに男性用の髭剃り用のジェルを塗って、再度剃刀を使って肛門の方の産毛まで丁寧に剃り落とした。

「りりかちゃん、きれいになりましたよ。」

先生は、りりかを起こして股間の手前に大きな手鏡を置いた。ビデオカメラは、りりかの顔と股間とを交互に写していた。

「りりかちゃんも見てごらん、お股が赤ちやんみたいですよ。」

「……。」

りりかには、自分のツルツルの股間を見て呆然として、声も出なかった。先生は、手鏡を外して、ビデオカメラに向かう。

「上も脱いで、みなさんに被験者の身体を見ていただきます。」

そういつと、りりかの上着を脱がし始めた。

りりかには、先生の指示通りに腕を動かして、ブラジャーも外された。

「りりかちゃん、ベットから降りてそこに立って。」

ビデオカメラは、りりかの全裸をあらゆる方向から写していった。

「被験者の身長は、142cm、体重は34kg、スリーサイズは、上から71、55、70です。」

りりかには、こんなことまで、言われると思っていなかったので、恥すかしてで身体中が真っ赤になった。

「りりかちゃん、今の感想は？」

「恥すかしいです。」

りりかには、かすめた声で答えた。

先生は、ビデオカメラに向かって話し始めた。

「今日は準備ですので、被験者のプロフィールを紹介しました。明日から三日間、学園付属の幼稚園に体験入園を行います。三日間での彼女の心理面の変化や、他の園児たちの様子レポートしてください。今日はこれで終わります。」

優子はビデオカメラを、三脚に戻した。

先生は、りりかを全裸のままベットへ寝かせると、股間が濡れているのに気づいた。

「りりかちゃん、興奮しちゃったんでしょ、おませさんだから。」

と言いながら、りりかのクリトリスを撫ではじめた。

「先生、やめてください。」

「大丈夫よ、ビデオは止まっているから。」

三脚の上のビデオカメラは、りりかの方を向いていたが、さっきまで点いていた赤いランプが消えていた。

「いいのよ、遠慮しないで。」

「いやあ。」

りりかには、感じているのか言葉の語尾が小さくなっていった。

「りりかちゃん、三日間はオナニーできないから、おもいつきりイッチやっついいいのよ。」

そういつと、先生は、クリトリスを剥いて、さらに撫で回し続けた。さらに膣に指を挿れて、処女膜を傷付けないように、愛撫しはじめた。

「どう、イキそう？」

りりかには、何も言わずにコクツと書いた。

それから一分もしないうちに、

「あっ、あっ。」

りりかには、イクと同時におしっこをもらしてしまった。

先生は、びっくりしたがすぐに冷静になって、りりかの頭を撫でながら言った。

「おしっこもらしちゃったね。今度からは、オナニーの前には、おトイレに行こうね。」

りりか、無言でうつなすいた。

「じゃあ、お股をきれいにしますがね。」

先生は、りりかをベッドから降りし立たせた状態でタオルで股間を拭いた。それから、となりのベッドへ横になるように言った。

「おもらしちゃんの子は、このオムツをしましよっね。」

そういつと、紙オムツをりりかに見せた。

「オムツなんて、大丈夫です。おもらししませんから。」

りりかは、慌てて言った。

「おもらししちゃったのは、誰ですか?。」

先生は、りりかの目を見て言った。

「私です。」

りりかは、小さい声で言った。

「オムツは、どいつの時に使いますか?。」

「お手洗いでおしっこやうんちがでない赤ちゃんやお年寄りが使います。」

「しちゃったよね。」

「はい。」

「じゃ、オムツが必要ね。」

そういつと、りりかの両足を持ち上げ、お尻の下に紙オムツを置いた。

それから、シツカロールをあてようとしたが、指を膣の中に挿れた。

「りりかちゃん、膣の中もきれいにしておこうね。」

そういつと、携帯用の膣洗浄洋品を持ってきた。オムツを外して、タオルをお尻の下に置いた。

先生は、膣洗浄用品を、りりかの膣に挿入し洗浄した。

「よし、これできれいになったわ。オムツしましよっね。」

紙オムツをお尻の下に置いて、オムツでりりかの股間を包んでいった。

「りりかちゃん、オムツを付けた感想は?。」

「赤ちゃんみたいで、とても恥ずかしいです。」

りりかは、イッたこともそつだが、同時におもらしをしてしまったことの方が恥ずかしくなっていた。

「りりかちゃん、心配しなくても大丈夫よ。幼稚園児は、おもらしちゃうんだから。」

そついつと、りりかの頭を撫でた。

「今日は、その上に制服着てかえっていいわ。明日は、この袋に入っている洋服を着るようにね。あと、オムツを取り替えるときは、優子に言っつね。絶対に一人で取り替えたりしないでね。これも研修の内だから。」

「はい。」

りりかは、研修だからと言われると、「はい」と返事をするしかなかった。

それから、制服を着ると挨拶をして保健室をあとにした。

優子は、またりりかの手を握ってきた。

「りりかちゃんて、あんなオナニーするんだ。」

りりかは、顔を真っ赤にして、うつむいて何も言わなかった。

「こんどは、私がいかせてあげるわ。」

優子は、そついつと強く手を握りしめた。

つづく

あとがき

はじめまして、えるごと申します。まだ第1章ですが、感想を頂けるとうれしいです。これからの楽しい幼稚園体験をこ期待ください。

また、一緒におもらししてくれる女性をさがしています。当方27才で神奈川県川崎市に住んでいます。

メールはこちら。

Elza@mail.goo.ne.jp #67

終